

— 症例報告 —

鉛筆による Implantation Dermatitis の 1 例

藤山 忠昭, 榊原 章浩, 沖津 卓二*長沼 廣**

はじめに

皮膚に異物がはいることによって生じる皮膚病変を Implantation Dermatitis (以下 ID) や異物肉芽腫等と称するが、今回、我々は折れた鉛筆片が刺入してから 13 年経過後に皮膚症状が現れた 1 例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

症 例

症例：17 歳，女子高生。

初診：平成 10 年 2 月 13 日。

家族歴：特記事項なし。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：平成 9 年 5 月に、鼻背の左側に硬い腫瘤があるのに気づき、同 7 月に某病院耳鼻科を受診し、CT 検査を受けた。その後当院耳鼻科に紹介され、MRI 検査を受けた後、診断不明のまま当科に紹介された。

現症：鼻背左側の鼻骨上顎縫合部にあたる部位に、12 mm 大の頂部表面に青色調の色素沈着を伴う骨様硬さの腫瘤を認める。下床との可動性は不良。初診時臨床診断は石灰化上皮腫と下された。(図 1)

CT 所見：同所に石灰化か骨性の陰影を認める。(図 2)

MRI 所見：同所に小結節状の T₂ 高信号域を認める。(図 3)

手術所見：局所麻酔下に、石灰化上皮腫として腫瘍直上皮切を行い手術を開始したが、腫瘤は周囲組織との癒着が強く、筋層に達する深さであった。さらに、色素変性が拡散性あるいは小血管に

はいり込んで認められるため、黒色腫等も考慮し迅速診断を行って手術を進めると、突然硬い物に突き当たり、鉛筆片であることが判明し、13×3 mm 大の木片を摘出した。(図 4) 尚、迅速診断は炭粉塊を含む組織所見で、悪性変化は認められなかった。さらに手術を進めると木片が摘出された局所は鉛筆の芯が溶解して肉芽内腔壁は真黒に変性しており、かなりの年数経過がうかがわれる所見を示した。(図 5) その後、患者および母親の話から、3 歳頃部位は不明なるも、顔面に鉛筆を刺した事が確認され、鉛筆破片による ID と確定診断されるに至った。

組織所見：炭粉を含む、炎症性肉芽組織がみら



図 1. 初診時所見



図 2. CT 像

仙台市立病院皮膚科 * 同 耳鼻科
** 同病理科

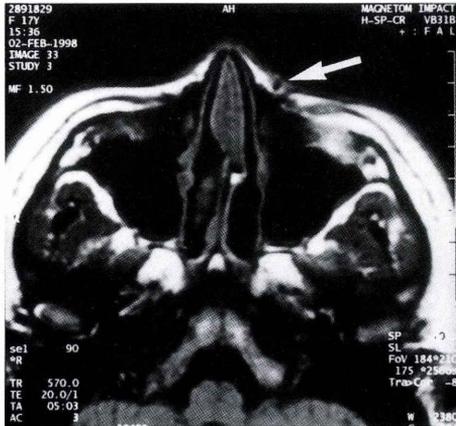


図3. MRI像

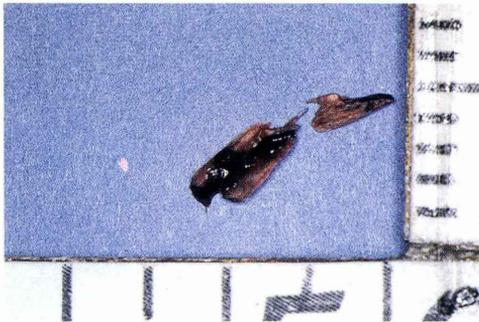


図4. 摘出された鉛筆破片



図5. 術中所見, 肉芽組織は鉛筆の芯が溶解し真黒に変性している。

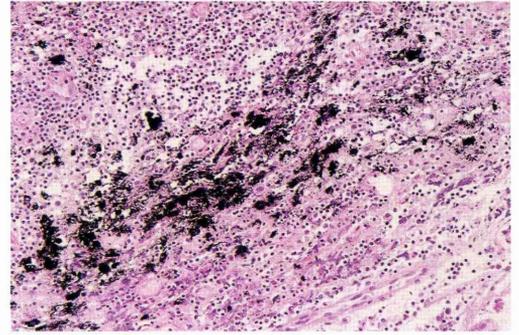


図6. 組織所見

れる。(図6)

考 察

IDの名称は、1974年 Mehregan と Faghri¹⁾ によって最初に報告されたもので、外傷等によって生体内に異物が刺入、あるいは迷入することによって生じる皮膚病変の総称をさしている。彼等は35例の本症例を詳細に検討して報告した。それによると、異物の種類は珪土16例、鉛筆の芯5例、木片や植物片5例、銀5例、その他魚骨、弾丸、ガラス片、塗料によるものであった。そしてその臨床症状は小結節、肉芽腫あるいは膿瘍や色素沈着として現れることが多く、組織学的には種々の程度の異物肉芽腫性変化であった。一方、本邦に於ける報告例^{2,3,4)}も散見されるが、1997年岡島等⁵⁾によると、わが国に於ては1978～1996年の間に20例が肉芽腫や異物肉芽腫として報告され、近年に至ってIDの名称を使用する報告がふえている。そしてその原因物質も箸、毛髪、ウニ棘、ハンマー破片、鉄兜破片等多種にわたっている。1983年我々⁶⁾は折れた箸による本症の1例を、診断困難であった異物肉芽腫として報告したが、この症例は10歳男児で、左下眼瞼外側に肉芽腫を認め、この部から眼窩内に3.5cmの箸片が垂直に刺入し、皮疹の出現迄8年の年月を要した症例であった。異物が刺入してから皮膚症状が発現する迄の期間を本邦報告例⁵⁾で検討してみると、大半は1年以内に皮疹が現れ、5年以上の年月を要した例は、我々の経験した2症例を含めて5例みられる。今回の報告例は鼻骨上顎縫合部で眼角筋等比較的

軟部組織に富む部位で、しかも鉛筆片が皮下深く埋入して肉芽組織におおわれてしまったため長期間無症状に経過したと思われるが、このように異物の種類の他に、外圧等を受けにくい部位や刺入深度に左右されて長い間無症状のまま温存されるものと推測された。

我々は初診時に本症の臨床診断を下すことが出来なかったが、このことについては、受傷時に本人や周囲の人が異物の刺入を認識している場合には、局所所見とあわせてIDの診断は容易と思われるが、我々の経験した2症例の如く長期間無症状に経過し、異物刺入の手がかりが不明な症例は、たとえCTやMRIに異常所見を認めても、IDが念頭にない限りきわめて診断に窮するものであり、実際、切開や摘出術、あるいは組織検討後に改めてIDと診断されるのも頷けることと思われる。今回、我々はIDの病名を使用して報告したが、異物が生体内にはいることによって生じる皮膚病変に対する包括的名称を表しているため、従

来使用した異物肉芽腫の名称に比較し理解しやすく、本邦に於ても徐々に普及するものと考えられる。いずれにせよ、日常診療において、かかる疾患も常に鑑別診断として念頭に置いて対処することが大切なことである。

文 献

- 1) Mehregan AH et al: Implantation Dermatoses. *Acta Dermatovener*, **54**: 61-64, 1974
- 2) 奥 知三, 山内 卓: 折れた箸による Implantation Dermatoses の1例. *皮膚臨床*, **29**: 1000-1001, 1987.
- 3) 松川 中: Implantation Dermatoses の2例. *皮膚臨床*, **31**: 454-455, 1989
- 4) 出光俊郎: ハンマーの破片による Implantation Dermatoses. *皮膚臨床*, **33**: 1449-1452, 1991
- 5) 岡島光也, 宮本秀明: 54年の経過を有した Implantation Dermatoses の1例. *皮膚臨床*, **39**: 1875-1878, 1997
- 6) 蔵本陽子, 藤山忠昭: 診断困難であった異物肉芽腫の1例. *日皮会誌*, **93**: 1259, 1983